



むかし、ある山の中に、若者わかものと年とつた母親がふたりで暮らしていました。

ある日のこと、若者がいつものように山で木を切つていてるくと、どこからか苦しそうなさけびごえが聞こえました。声をたよりに行つてみると、大きなとらが、口を大きく開けたまま苦しそうにうなつていました。そばへ寄つておそるおそる口の中をのぞいてみると、のどにかんざしがささつていました。若者は、

(こいつ、女人を食つたんだな)と思つましたが、かわいそなうでかんざしを抜いてやりました。とらは、何度もおじぎをして山のおくへ帰つていきました。

それからというもの、とらは毎日、山の木をひつこぬいては、若者の家の庭に投げこむようになりました。おかげで、若者は苦労して山で木を切らなくとも暮らしていけるようになりました。

ある日のこと、とらが、美しい娘むすめを若者の家に投げこんでいきました。娘が氣ぬつていたので、若者と母親はおもゆを飲ませて介抱かいほうしました。娘は都の大臣だいじんの娘でした。娘は、

「あしたはわたしの結婚式けつこんしきなのです。髪かみを洗あらつてしたくしていましたら、とらが飛びこんできてここへさらつてきたのです」といいました。若者は、とらが自分のために花嫁はなよめをつれてきたのだと知りました。

やがて、若者と娘は夫婦ふうふになりました。

ふたりは、娘の親たちにあいさつにいくことにしました。けれども、山の中にはお土産みやげに持つていくものが何もありません。とらはそれを知つて、結婚式やお祭りのある家にかたつぱしから飛びこんで、たくさんのお餅もちやお菓子かし、ごちそうを持って帰つてきました。牛や馬までねすんできました。若者は、牛や馬にたくさんの贈り物おくをつんで都に向かいました。

大臣は、死んだと思っていた娘が帰つてきたのでおおよそ一びむかでふたりを迎えました。

若者は、年とった母親を都に呼び寄せていつしょに暮らしました。

何年かたつたあるとき、都に大きなとらが現れて人や牛を食い殺し、大騒ぎになりました。王さまは、弓や鉄砲の名人たちを集めて、とらを退治させようとしましたが、どちらは駆けまわって、弓も鉄砲もどうしても当たりません。そこで王さまは、こんなおふれを出しました。

とらを退治した者には、千金をあたえ、大臣に取り立てよう

その晩、とらが若者の家にやつて来ていました。

「わたしはもう死ぬ年になりました。どうせ死ぬなら、あなたにてがらを立てさせてあげましょう。あした、私が都へ出て暴れますから、あなたはどんな鉄砲でもかまわない、私を撃つてください。ねらいなど定めないで、かつてにぶつ放してくれればよろしい。わたしはきっと倒れて死にます」

つぎの日、若者は、

「わたしがとらをしとめましょう」と、王さまに願い出ました。

まもなく、とらが町に現れて暴れだしました。若者は出ていて、ろくろくねらいも定めず鉄砲をぶつ放しました。玉はみごとに当たってとらは倒れました。

若者は、大臣に取り立てられ、千金のほうびをもらって、いつまでも幸せいに暮らしたということです。

原話：『朝鮮民潭集』孫晋泰著 勉誠出版刊

再話：村上郁